

## 診察券1枚、受診どこでも 年度内に府内100機関参加

2011年2月7日



1枚で複数の病院が受診できる「地域共通診察券」。京都医療センターで試験運用が始まった＝伏見区

1枚の診察券で、複数の病院を受診できるサービスに向けた取り組みが、京都市の医療機関で始まった。地域周辺の病院が患者の医療情報を共有し、検査・投薬の重複や、救急のたらい回し防止にもつなげようという試みだ。3月までに京都市や宇治市などにある約100の医療機関が参加し、地域医療の強化をはかる。

「診察券が何枚もあると、なくしたり、間違っって持って来たりと大変。これ1枚で済めば本当に便利ですね」。今月初め、伏見区の国立病院機構・京都医療センターを訪れ、メタボリック症候群の診察を受けた男性(49)は、そう話した。

手にするのは、キャッシュカードと同じサイズの「地域共通診察券」。ICチップが組み込まれ、受診するたびに診断内容や投薬情報などがホストコンピューターに蓄積される。1枚に30の医療機関を登録できる。各病院は検査の重複を避けることができ、よそで処方された薬との飲みあわせが悪くないかもチェックできるという。

発行するのは、情報技術で医療・福祉を支援するNPO法人「日本サステナブル・コミュニティ・センター」(SCCJ、上京区)。専門医や高度な医療機器が整う大きな病院に患者が集中しがちな中で、地域の病院や診療所のネットワークによって「ひとつの巨大な医療機関」をつくり、地域医療の効率化をはかろうと企画した。

企画は昨年、総務省の委託事業に採択され、まず先月末から京都医療センターで運用が始まった。3月末までに京都市、宇治市、城陽市、久御山町の総合病院や診療所など約100カ所の医療機関が参加し、試験的に運用する。

これに合わせ、医療機関のデータベース化も進める。どんな専門の医師が何人いるか、検査機器は何台あるか、空きベッドは何床か。そうした情報を各医療機関に登録してもらい、各自治体の消防局と連携して救急搬送中に検索できるようにするという。

京都でモデルケースをつくり、他府県でも運用をめざす。考案したSCCJ顧問で京都医療センターの北岡有喜・医療情報部長は「この仕組みを導入すれば、検査と手術を別々の病院で担当することも容易になる。救急患者や妊婦のたらい回しも避けられる」と話している。(堀田浩一)